

「音楽と言語」

本書は、ギリシャ出身のドイツ音楽学者であるゲオルギアーデスの講義を聞いて感銘を受けた、精神医学者であり、哲学の論考も多く残している木村敏が訳出したものである。西洋音楽の変遷を辿りながら、音楽と言語の関係性について論じている、歴史的名著として知られている。本書では、西洋音楽史を細かく時代分けをした上で、古代まで遡り、音楽と言語の関係性の変遷を辿りながら考察が進められる。とりわけ、ミサと呼ばれる音楽の形態を一つの大きな軸として、人間活動の歴史の中で、音楽と言語がいかにして発展してきたのが議論されている。

ミサとは、カトリックで行われる典礼のことである。祈りの文によって構成されているが、ミサが執行される日や目的に関わらず、唱えられる文を「通常文」ⁱと呼び、具体的には「キリエ」、「グローリア」、「クレド」、「サンクトゥス」、「アニュス・デイ」などが挙げられる。これらの「通常文」に音楽をつけたものが、本書での考察対象となっている「ミサ曲」であり、時代を超えた多くの作曲家が「ミサ曲」を残している。

本文の内容を詳しく紹介する前に、なぜ音楽と言語の関係性という問題において、ミサ曲が扱われる必要があるのかについて考える。ミサ曲が本書で扱われる理由として、言語である「通常文」を定点として、そこにいかにして音楽と結びついてきたかを作曲家や時代ごとに容易に比較できるからであると評者は考えている。また、ミサ曲は西洋音楽史上、古くから用いられてきた形態であり、音楽と言語の関係性を、時代を遡って考察することができるからである。これらの理由から、本書でミサ曲を扱うことが最適であると考えられる。

1章から11章までを通して、古代、カロリング朝以前の時代から現代までの西洋音楽史を軸に、言語を伴う宗教曲（特にミサ曲）について、典礼としての音楽から芸術としての音楽への変遷に焦点を当てて考察している。第2章では、古代ギリシャと西洋を結びつけるものについて言及されている。音楽は韻文の中に存在するものであり、ギリシャ人にとっての韻文とは言語であると同時に音楽でもあったとし、古代ギリシャにとっての音楽は、現在の音楽の認識との間に乖離があったことを強調している。本書で「長短リズム性」と呼ばれている固有の音楽的リズムを用いて、当時の典礼音楽である「グレゴリオ聖歌」を生み出していた。ギリシャ人が特有に持っていた「ムシケー」という言葉が含有する意味の考察を通して、現代にまでつながる西洋音楽の源泉の理解を目指していると考えられる。第3章では、古代ギリシャからカロリング朝時代へ移り変わる過程で、多声法や散文の要素が加わり、グレゴリオ聖歌との断裂が見られた。その後、中世では記譜法が確立し、音楽が「学問」として扱われるようになる。

その後も、典礼用の音楽が徐々に形を変えて発展していくが、第6章で触れられているパレストリーナの時代で一つの転換が見られる。それは、これまで典礼の「手段」であった音楽の営みが「人間の表現ⁱⁱ」と変化する過程が見られた最初の時期であるということだ。典礼ミサのテキストに適切な音楽を提供するという営みは古代から変わらないが、「言語が文章の構造として音楽的にとらえられているⁱⁱⁱ」とあるように、単に言語ありきの音楽では

なく、音楽と言語が互いに補完的な役割へと変化していった過程が見られる。しかしながら、この時代にはまだ内面性や神秘性などが音楽として表現されておらず、「人間の表現」としての音楽という新しい段階の入り口にすぎないと言及されている。こうしたパレストリーナの姿勢はモンテヴェルディによって引き継がれ、その後ドイツ語による宗教音楽の作曲がされるようになり、音楽がさらに成熟したものとなる。本書では、ラテン語とドイツ語の比較やシュッツの作品を考察対象として、ドイツ語が音楽をより豊かなものとして成熟させてきた理由を解明している。

その後、「音楽の父」として知られている J.S.バッハによる「音楽の器楽化」が見られるようになる。「言語は音楽の目標ではなくて手段にすぎなくなり^{iv}」とあるように、これまでテキストに曲をつけることが「音楽による言葉の実現^v」であったが、バッハ以降では言葉の響きと音楽の作曲は個別のものとして捉えられるようになった。バッハの作品では言語の音楽化としてのこれまでの宗教音楽から、音楽の器楽化への変化が見られ、この器楽の要素が「語られた言葉の中に含まれている意味関連以上のものを具体的に表現することを可能ならしめたもの^{vi}」なのである。ウィーン古典派にも器楽的な要素が強く見られ、述べられる意味内容を器楽的な方法で音楽的に捉えつつも、言語が持つ表情や言語形態もそのまま活かすという試みが行われていた。本書では、ハイドン初期の弦楽四重奏曲が取り上げられており、実際に譜例を用いたフレージングやリズムの考察から、いかにして言語を音楽的に表現することの試みがなされていたのかを追求している。このような姿勢は、ロマン派に受け継がれる。ロマン派では、言葉による内面の表現が重視されており、ミサ曲のように言葉が音楽によって対象化されるのではなく、言葉自体が感情として存在するものとして捉えられていた。テキストに内包されている感情、気分がそのまま音楽として表出されていたという特徴が読み取れる。第 14 章の現代では、主にストラヴィンスキーの作品を中心に議論されている。これまでの音楽の成り立ちが「典礼から音楽」だったのに対し、ストラヴィンスキーは、自らの作曲理念や芸術を出発点として最終的には典礼に到達している。このように、ストラヴィンスキーの時代に見られた「典礼への帰還」の動きを考察した上で、「現代にとって真に重要なもの^{vii}」に言及し、現代に生きるわれわれにとってのミサの意味を主張している。

以上の内容をまとめると、テキストに適切な音楽を提供した、典礼の手段であった音楽が、時代が進むにつれて。器楽によって表現される言語や感情としての言語、芸術的要素を持つ表現のための音楽としての変遷を読み取ることができる。また、歴史が進むにつれて音楽が宗教的なテキストから独立して制作されるようになり、かえって音楽自体がある種の「儀式的なもの」として大衆社会における得意なジャンルを形成していったことが分かる。

しかし、これを単に「言語の音楽化」から「音楽の言語化」へ変化したと考えることはできないと評者は考える。なぜなら、第 15 章の「歴史としての音楽」で言及されているように、「ミサ音楽というものは、この不変の意味を時代時代に応じて妥当な形で解釈するもの」

であり、言語と音楽の関係性がある時代の一部分を点として切り取って考えることは不可能だからである。また、著者は、音楽の解釈の究極目標は音による現実化にあり、作品の意味は楽譜と音表象の総合の中にあると主張している^{viii}が、評者自身もこれまでに行った数多くの作品鑑賞の経験から、楽譜に書き起こされた音楽は、演奏されて初めてその表象が表出するものであると認識している。場所や時間を問わず、時代を超えて同じものを享受できる美術作品とは異なり、音楽作品は同じ楽譜でも指揮者や演奏者の解釈によって享受できるものが変わる。演奏されることによって初めて作品が完成されると言っても過言ではないだろう。これがゲオルギアードスのいう「現実的な性質^{ix}」であり、過去とわれわれ自身という二つの異なる要素がはっきりと認められる所以なのである。このように、「過去と現代」、「譜面と実際に演奏される音楽」というように、音楽の成立に関する諸問題には断絶が見られるため、音楽と言語の関係性においても一概に断定できないという複雑性を孕んでいる。

また、著者は音楽が極めて現実的な性質を持つために、我々が「手をかす^x」必要があるとした上で、音楽作品の生命を保ち、歴史に伝えることの重要性を読者に訴えている。これらの著者の主張から、本書の目的として単に音楽と言語の関係性を解明するだけでなく、音楽作品の保存と継承を読者に訴えかけるというメッセージも含まれているのではないかと評者は考える。音楽学部を有する本学が、「神戸女学院の100冊」として本書を選出した理由として、宗教曲やミサ曲を深く理解するためだけでなく、音楽史を学ぶことの大切さや、数多く存在する古くからの作品を次世代へ受け継ぐ使命が私たちにあるという意味合いも含んでいるのではないか。

本書の主題は、音楽と言語の単なる並列的な関係性ではなく、「音楽の言語化」と「言語の音楽化」の、ある意味弁証法的な関係性をどう捉えるかということが軸となっている。音楽と言語は互いに補完的な役割を果たしているのか。片方がもう片方を補っているのか。このような疑問を投げかけながら、西洋音楽史を辿ることにより楽曲の構造や和声などの理論的な面に留まらない、現象学的な見方でより真髓に迫って理解することができるのである。

本書が優れている点として、着眼点の豊かさや、他の音楽の専門書籍には見られない、哲学的な考察が含まれているということが挙げられる。歴史が進むとともに、典礼の手段としての音楽から、人間が表現するための音楽へ変遷を遂げてきたことは、西洋音楽に通ずる者なら誰もが知っている事実であるが、本書が従来の西洋音楽史や音楽理論などの書物と比較して新規性に優れている点として、リズムと言語のアクセントの関係性に着目していたことや、西洋音楽史では他国と比較して影の薄い存在となっているイギリスで発達した音楽について、その出来事の重大さを指摘している点が挙げられる。また、理論として客観的に説明できる表面的な意味での音楽ではなく、その存在や表象それ自体を深掘りするような、哲学の要素も取り入れられている。

音楽と言語の関係性については、本書で取り上げられている宗教音楽の他にもさまざまな方面で触れられている。ブリテンの《戦争レクイエム》では、一つの作品の中に「ラテン

語と英語」、「詩と典礼文」が混ざり合う形で作曲されている上に、「オーケストラと室内楽」といった言語以外の要素も対比されており、言語と音楽の両面において非常に複雑で難解な構造を持っている。また、R.シュトラウスのオペラ、《カプリッチョ》にも、言語と音楽の対比が見られる。このオペラはサリエリのオペラ・ブッフア、『まずは音楽、それから言葉』が元になっており、終結部には「言葉が先か、音楽が先か」という問題を残して幕を閉じている。このように、「音楽と言語の関係性」の諸問題は、本書で取り上げられている議論に留まらず、音楽史上に数多く残している。本書は音楽と言語の諸問題を解明する先駆けであり、それらを解明する一助となるだろう。

ⁱ 通常文全文については p.290 を参照。

ⁱⁱ ゲオルギアーデス (1994) 『音楽と言語』、講談社学術文庫 p.96

ⁱⁱⁱ ゲオルギアーデス、p.94

^{iv} ゲオルギアーデス、p.142

^v ゲオルギアーデス、p.142

^{vi} ゲオルギアーデス、p.152

^{vii} ゲオルギアーデス p.259

^{viii} ゲオルギアーデス、p.266

^{ix} ゲオルギアーデス、p.267

^x ゲオルギアーデス、p.277